

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

JANUARY
2019

1

知多西国を知っていますか？



知多西国
三十三所



奉納
経

日本最古の霊場を 知多半島に「写す」

知多西国という霊場が知多半島にあることを御存知だろうか。

字面が似ているが「知多四国」ではない。本誌でもこれまでたびたび取り上げてきた知多四国は弘法大師空海の霊場だが、これに対して知多西国は観音菩薩の霊場だ。知多半島で観音霊場というところ、南知多町と美浜町を巡る「南知多三十三観音」がよく知られているが、知多西国はそれとも異なり、札所寺院は知多半島全域に散らばっている。

知多西国は知多四国よりも歴史が古く、戦前までは巡拝者も多かったという。しかし、戦後はほとんど顧みられることなく、歴史の中に埋もれつつあった。再び光が当たるようになったのはつい最近の平成二十二年（二〇一〇）。復興の機運が高まって納経帳が発行されたのをきっかけに、知多四国や南知多三十三観音とあわせて巡拝する人が年々増えてきた。しかし、地元でも知名度はまだそれほど高いとは言えない。

その知多西国三十三所霊場が、平成三十一年に開創二百五十年を迎える。今回は、そんな知多西国を紐解いてみよう。が、その前に、この霊場の元になった「西国三十三所」とは何かを説明しておきたい。

知多西国を 知っていますか？

知多四国を筆頭にさまざまな霊場がひしめく知多半島の中で最も古いとされているのが知多西国三十三所霊場だ。開創二百五十年という節目の年を前に、観音菩薩が導く穏やかな信仰の道を歩いてみた。

西国三十三所は、四国八十八ヶ所と並んで全国的な知名度を誇る霊場だ。札所は、和歌山県那智勝浦町の一番青渡岸寺から岐阜県揖斐川町の三十三番華嚴寺まで、近畿地方を中心とした二府五県の広範囲に分布している。

魔大王に「人々を救うために三十三観音の霊場をつくり、巡拝を勧めよ」と告げられたことにより、霊場を開いた。三十三という数は、観音菩薩が衆生救済のとき三十三の姿に変身するとされていることに由来する。

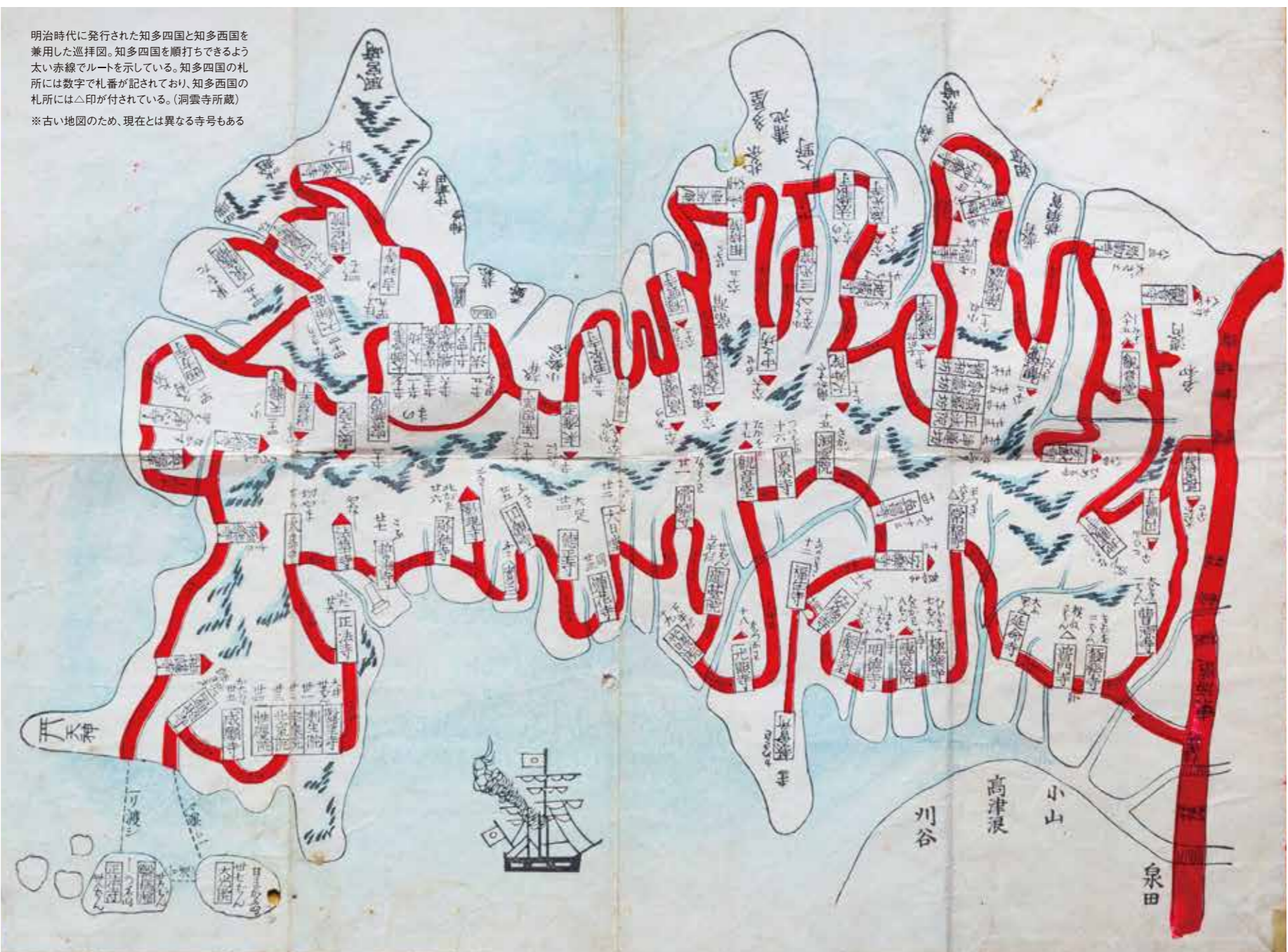
花山法皇によって復興される。花山法皇は、十七歳で先帝より譲位され天皇となつたが、わずか二年で退位し、十九歳で法皇となる。その後、仏門に入り修業を続ける中で、忘れかけられていた三十三観音霊場を見出だし、巡拝した。このことがきっかけとなってこの霊場に再び光が当たることになる。

だが、江戸時代に入り庶民の間で信仰と物見遊山を兼ねての伊勢参りや熊野詣が盛んになると、西国三十三所を巡る人も増えてゆく。とはいえ当時はまだまだ旅というものは個人にとつて「一生に一度」級の一大イベント。現代のように、思い立ってふらりと気楽に旅立てるわけもない。そこで、参拜できない人にも御利益を授けようと、「写し霊場」と呼ばれる西国三十三所や四国八十八ヶ所のミニ版が全国各地に開かれるようになっていった。

多くの人々が、このあたをたたく懐深い知多半島を巡り続けてきた。

知多西国が誕生したのもそんな時代である。

開創は江戸時代中期の明和七年（一七七〇）。岩屋寺中之坊の第十六世智善上人が、観音菩薩のお告げによって開いたと伝えられている。文化六年（一八〇九）に開創された知多四国より四十年ほど前であり、西国三十三所が日本最古の霊場であると同様に、知多半島最古の霊場と考えられている。ただ、これまで本誌で何度か紹介したように、知多四国の開創者である亮山阿闍梨のエピソードは多く伝わっているのに対し、智善上人についてはほとんど記録が残っておらず、その人物像やどのようにして札所寺院を決めたのかなど、詳しいことは不明である。そのことも、知多西国が一時期忘れられていた理由のひとつかもしれない。



明治時代に発行された知多四国と知多西国を兼用した巡拝図。知多四国を順打ちできるような太い赤線でルートを示している。知多四国の札所には数字で札番が記されており、知多西国の札所には△印が付されている。(洞雲寺所蔵) ※古い地図のため、現在とは異なる寺号もある

まるで兄弟のよう？

知多四国との共通点

知多西国の札所寺院は全部で三十三か寺。知多四国や南知多三十三観音のように番外札所はない。武豊町と篠島、日間賀島には札所寺院がないが、知多半島全域に札所が点在している。

第一番札所は南知多町岩屋にある岩屋寺。南知多にありながら深山幽谷の雰囲気が漂う山懐に抱かれた寺だ。霊亀元年（七一五）、元正天皇の勅願により奈良時代の高僧・行基によって開創され、弘法大師が知多半島を巡錫した折に参籠したと伝わる知多半島きつての古刹だ。智善上人は岩屋寺を一番、奥之

院を二番とした。巡拝路はまず南へ向かう。かつては岩屋と豊浜初神の間の山中にあった恩徳寺が三番札所だったが、再興にあたって豊浜市街地に近い正衆寺が札所を受け持つことになった。豊浜の四番影向寺、五番観音寺を経て、師崎の六番神護寺へ。ここで折り返して三河湾沿いに北上。美浜町豊丘矢梨の法華寺に立ち寄り、時

志観音こと八幡影現寺まで行ったところで、今度は南西方向に少し戻り山を越える。内海の九番持宝院へ出たら、ここからは伊勢湾伝いにひたすら北上だ。美浜町西部から常滑市南部にかけて間が空くが、常滑市大谷の十番来応寺より先は、東海市荒尾町の二十四番観音寺まで知多四国霊場と同じようなルートを辿る。

半島の付け根近くまで来たら、東に進路を変えて半島を横断。大府市横根町の二十七番普門寺からは大府市・東浦町を南下して半田市乙川の三十二番光照寺まで行き、最後は少し内陸に入つて阿久比町植大の三十三番観音寺で結願となる。島には渡らないが、山あり海ありの平野ありという半島の風光を楽しめる。

文章にすると少し分かりにくい、札所番号を辿つてゆくと、Sの字を逆になぞる一筆書きになっている。無限大を表す∞マークに見えなくもなく、繰り返しの巡拝を促しているようにも感じられる。

ここで思い出すのが知多四国だ。知多四国の巡拝路は知多半島をきれいに一周するコースになっているうえ、八十八番（大府市共和の圓通寺）から一番（豊明市栄町の曹源寺）まで距離も近く、二度に限らず何周でも巡拝を」という意味が込められているという。知多西国の巡拝路もそれと同様なのではないだ



神護寺の観音堂



洞雲寺の観音堂に掲げられた知多西国御詠歌の額



洞雲寺の観音堂



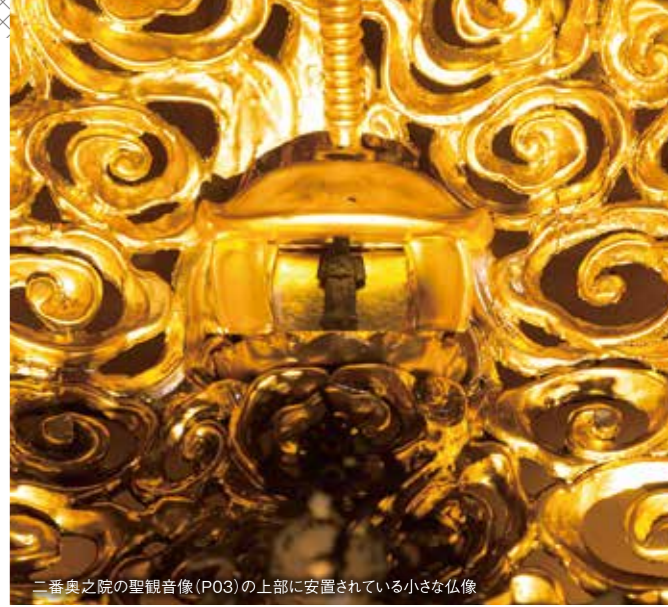
各寺330枚限定配布のトレカ



全寺の朱印を取めた記念軸



各寺の観音菩薩の姿をあしった記念御影印



二番奥之院の聖観音像(P03)の上部に安置されている小さな仏像

その優しさに導かれて私たちはまた、観音さんに会いにゆく。

るうか。いや、先に成立していたのは知多西国なので、むしろ知多西国を開いた亮山阿闍梨が知多西国を参考にしたと考えた方が腑に落ちる。

また、三十三の札所のうち二十九か寺が知多西国の札所でもある(残りの四か寺は南知多三十三観音の札所)。亮山阿闍梨は知多西国を開くにあたって、半島全域を巡って札所を受け持つてもらえるよう各寺院に「お願い」したとされており、中には説得が困難だったところもあったらしい。その際、すでに知多西国の札所を受け持っていた寺院ならば、霊場や札所の何たるかを理解しているの、話も早かったことだろう。両方の札所になっている寺院が多いのは、そんなことが理由なのかもしれない。

知多西国の再興を中心となって進めた、常滑市井戸田町の洞雲寺(知多西国十三番、知多西国六十二番)の住職を務める磯部順基さんは「むかしの巡拝者は、知多西国と知多西国を同時に巡っていたの、と思うます」と話す。その理由は、古い知多西国巡拝案内図のほとんどに、知多西国の札所を示す印が寺院に記されていることがひとつ(前頁の地図はその一例)。そして、知多西国と知多西国の両方の札所番号を刻んだ古い道が、知多半島にいくつも残っていることがもうひとつ。

洞雲寺の境内にも両霊場を併記した石柱がある。観音堂の前に建つのがそれで(下段右の写真)、もともと樽水区内の道端に立てられていた道標を七、八年前に寺が譲り受けて移設したもの。建立は江戸時代後期の文政十年(一八二七)。正面には「當郡 西国十三番 新四国六十二番 札所 洞雲寺」と刻まれている。當郡とは当郡、つまり知多郡の意味だ。本誌2018年3月号「弘法さんの春、納経帳を手にも」でも触れたように、知多半島には知多西国を筆頭に数多くの霊場があり、巡拝者は歩いてる途中に寺があれば、自分が巡っている霊



知多西国の観音菩薩と知多西国の弘法大師が併記された古い手書きの納経帳



新四国(知多西国)の案内書。表紙に「附・三十三所」とあるように知多西国の札所も△印付で記載されている。(洞雲寺所蔵)



洞雲寺境内に、移設された両霊場併記の道標

場の札所でなくても、こだわりなく参拝していたと言われている。これらの標柱や案内図は、開創間もない頃から巡拝者やこの地域に、そのようなおらかさがあつたことを示しているのだろう。

盗賊の心を開いた 岩屋寺奥之院の聖観音

智善上人が観音菩薩のお告げにより開いた、ということくらいしか起源がわからない知多西国だが、岩屋寺には観音菩薩との縁を物語る次のような話が伝わっている。

今から四百年ほど前、江戸時代初期の慶長年間(一五九六―一六二五)のこと。一人の盗賊が岩屋寺奥之院の本堂に忍び込み、本尊である聖観音像を盗み出した。盗賊は寺から半里(約二キロ)離れた山海久村の浜へと走り、停泊させていた舟に乗り込んで逃げようとする。ところが、不思議なことに舟は地面に打ち付けられたかのようにびくりとも動かない。焦った盗賊は船を隅々まで調べたが、どこにも異常はない。いくら頑張っても動かないので、盗賊もほとほと疲れ果ててしまう。

その時、ふと「これは観音様がお怒りだからではないか」との思いが頭をよぎった。怖くなった盗賊は、あわてて奥之院に引き返して聖観音像を元のとおりに戻した。そして、自分の犯した罪を悔い、ついに発心出家して仏の道に入ったという。その奥之院の本尊である聖観音像は、今は岩屋寺本堂に祀られている。

その右側に祀られているのは知多西国の弘法大師像、そして左側に祀られているのが奥之院の本尊である聖観音像だ。03ページの写真がそれである。こちらは秘仏ではないので、内陣の外側からその姿を拝むことができる。また、毎月十八日に行われる「観音講」に参列すると、普段は入れない聖観音像の前でお参りすることができる。取材したのは観音講の当日ではなかったが、住職の後藤泰真さんの案内で、特別に間近で拝観させていただいた。細部まで精緻に彫りこまれた端正な像で、特に目と表情が印象的だ。「あなたらし

「ていることはすべて見通していますよ」と告げられているかのような眼差しで、思わず背筋が伸びる。件の盗賊が盗み出そうとしたのもこの像だったのだろうか。だとしたら、怖くなるのも領ける。

観音像をしつと眺めていると、頭に被った宝冠のすぐ上に小さなものがあることに気が付いた。目を凝らしてよく見てみると、金色に輝く光背の上部に宝塔が設えられており、その中にごく小さな仏像が安置されている。06ページ右上の写真である。

岩屋寺にはこんな話も伝わっている。約二一〇〇年前の平安時代初期、弘法大師が後に奥之院となる岩窟で百日間の護摩修法をした際、その護摩の灰で一寸八分(約五・五センチ)の観音像を作ったという。それこそがこの小さな仏像である、という伝説だ。こんなところでも観音菩薩と弘法大師が、ひいては知多西国と知多四国が繋がっている。

知多西国の各寺が祀る観音菩薩は秘仏が多いが、開創二百五十年の今年はいくつかの寺院で特別御開帳が行われる予定だという。また、各寺の本尊の観音菩薩をあしらった記念の御影印も納経帳にいただけるほか、納経をした人には各札所三百三十枚限定でトレカも配布されるというから、巡拝を始めるには絶好の機会だ。新たな出会いを求めてぜひ巡ってみてほしい。

平成三十一年に開創二百五十年特別御開帳を行う札所寺院

4/21~4/30

9番 持宝院 南知多町内海

内海市街地の北側にそびえる山の中腹にある緑豊かな寺院で、古くは桜の名所としても知られていた。本尊は如意輪観音。今回が初めての開帳となる。



3/1~3/31

16番 三光院 常滑市小倉町

大野城主だった佐治氏とゆかりの深い蓮台寺内にある。本尊は聖観音菩薩。基本的に五十年に一度の開帳だが、今年のような特別の年に行くこともある。



2/2~2/4

6番 神護寺 南知多町師崎

昭和五十年代から平成七年頃まで、当寺の住職が信者を率いて知多西国を巡拝していた。本尊は聖観音菩薩で、毎年節分前後に開帳される。



11/1~11/30

14番 大善院 常滑市奥条

境内には樹齢約五百五十年のイブキの巨木がそびえる。本尊の十二面観音は毎年三月の第二日曜に開帳されるが、今年が秋の一か月間も開帳する。



9/17~10/18

13番 洞雲寺 常滑市井戸町

夏になると境内を蓮の花が包みこむ「蓮の寺」としても親しまれている。観音堂の聖観音菩薩の次回開帳は本来二〇三二年なのだが、今年が特別に開帳される。



5/17~6/18

1番 岩屋寺 南知多町岩屋

知多半島を代表する古刹のひとつで、近年は毎月十七日の大祭に合わせてマルシェイベントなども開催している。本尊は本編でも紹介した十二面観音。



CCNCエリア外では、29番傳宗院(東浦町・5/24~6/18)、18番大智院(知多市・10/17~11/18)で開帳されるほか、28番常福寺(大府市)で寺展が予定されています。